

il est NP 文と c'est NP 文

藤田 康子

0. はじめに

人称代名詞 *il* と指示代名詞 *ce* の競合については、「同定文・記述文」、「値・役割」などの概念を用いた考察が行われ、多くの指摘がなされてきた。本稿ではそれらの指摘を受け、「集合」、「値レベルにおける識別」および「役割レベルにおける識別」という概念を導入し、*il est* NP 文と *c'est* NP 文の意味構造について考察する。

本稿で考察する対象は次のものに限定する。*il* については非人称用法は除外する。*ce* については文中の不定法・節を指す用法、強調構文は除外する。なお、*il*, *ce* の指示対象が NP として表出されるとき、これを NP_1 , *être* に続く NP を NP_2 と記すことにする (Gustave, *il est* claveciniste / Gustave, *c'est un* claveciniste において NP_1 =Gustave, NP_2 =(un) claveciniste)。

1. 先行研究と問題点

1.1 役割・値と *il*

井元 1991 は, Fauconnier 1984 の役割・値概念を援用した仮説を提案している。以下, 仮説の妥当性を検討する。

井元はまず, (1a) のような文の *il* は *son mari* の値を, (1b) の *ce* は *son mari* の役割を受けると仮定する (p.120)。

- (1) a. En ce temps-là, son mari, *il* était linguiste.
 b. En ce temps-là, son mari, *c'était* un linguiste. (井元 1991, p.119)

しかし, (2) において *il* は *un juge* の値を受けていない。

- (2) A la Cour suprême, un juge a moins de vingt ans.
 a. En 1936, (*il / ce juge*) était de Californie.
 b. En ce moment, *il* est de Brooklyn.
 c. *Il* est généralement irlandais. (Fauconnier 1984, p.79)

井元は *un juge* と (2a), (2b), (2c) の *il* は同一の役割を共有しているが, それぞれ異なる値を持つと考える (p.131)。

ところが *il* は人を指す場合, 先行詞の役割に照応せず, 男女の性別に基づいて値のみに照応することがある。

- (3) Mon docteur vient d'agrandir son cabinet de réception. *Elle* avait trop de clients. (Kleiber 1990 in 井元 1991, p.127)

このような観察から井元は *il* は『十全な名詞句』として存在している要素を指示する」という仮説を提案する。「十全な名詞句」とは「性・数の分類化が可能な特性を持ち」, 「その特性が... 値を自動的に与えることになる名詞句」であり (p.124), *il* は必ず値をもつ名詞句として定義される。

しかし, 次の例は *il* が役割解釈され, この仮説に反する⁽¹⁾。

- (4) Le président, *il* change tous les sept ans. (井元, p.129)
 (5) Un cheval est un mammifère, et *il* se laisse domestiquer. (井元, p.121)

この2例では *il* はさまざまな値を取りえる変項を指示するので, 役割解釈されるはずである。因みに Fauconnier 1984 には *Le président change tous les sept ans.* が大統領は7年ごとに別の人に代わると解釈される場合, *le président* は役割解釈名詞句であることが明記されている (pp.60-61)。ところが井元の仮説ではこのような総称名詞句は値解釈とみなされる。

その説明は次のような矛盾をはらんでいる。まず, (4) の *le président* は時間パラメータは変数だが, 場所パラメータが固定されているので値解釈を受ける

という(p.129)。ならば(5)の *un cheval* は時間パラメータも空間パラメータも固定されていないので、役割解釈を受けるはずである。ところが、このような「総称名詞句は『種』そのもの、あるいはプロトタイプとしてある一成員を『値』とする」という (p.136)。

すなわち、井元の仮説では役割・値という用語の使い方が一貫していないのである。*Fauconnier* の定義を変更しない限り、これらの *il* は役割解釈されると考えるのが妥当である。

また井元の仮説に従うならば、値についてのみ属性を述べることができることになるが、この点も納得しがたい。役割解釈される名詞句についても名詞句が対応する変項の属性を述べることはできるはずである。以上より、*il* が値解釈されるという仮説は問題があると言える。

1.2 *ce* の機能

次に *ce* について考える。井元は *ce* については名詞句の役割のみを受ける場合、値のみを受ける場合、役割も値も受けず、語用論的関数で結ばれた対応物を指す場合があることを指摘し、役割・値概念に基づいた定義をしていない。

東郷 1993 は(6)は *le vice-président des Etats-Unis* が役割解釈されるという解釈も、値解釈されるという解釈も可能であると述べている (pp.84-85)。

(6) *Le vice-président des Etats-Unis, c'est un crétin.*

東郷は、前者の解釈は *ce* が「役割解釈される名詞句をさす」同定文であり、後者は「値と役割を兼ね備えた名詞句」について「話者があらたな観点からその役割解釈を問題にする」再同定文であるという仮説を提案している (pp.84-85)。これらはある変項に値を与える文、ある値に別の役割を与える文と言い換えることができる⁽²⁾。

4 節で見るように *c'est* NP 文にはこの他、ある変項にすでに与えられた役割 (NP_1 の役割) とは別の役割 (NP_2 の役割) を与える文 (4.4) やある値 (NP_1 の値) に異なるスペースに置かれた別の値 (NP_2 の値) を対応させる文 (4.5)

もある。すなわち, *ce* は役割・値に関係なく名詞句を受けることができ, NP_2 との対応関係も役割・値概念に基づいて一元的に説明できるものではない。

2. NP の特性

il est NP 文と *c'est* NP 文の競合の問題は, *il* と *ce* が何を指すかという問題としてとらえるだけではなく, 文全体がどのような意味構造をもつかという観点からも考察する必要がある。2節ではまず NP の特性について考察する。

2.1 属性とカテゴリーの成員

次の発話の意味構造をみよう。

(7) *Que fait Paul? — Il est vétérinaire.*

(8) *Qui est-ce? — C'est un vétérinaire.*

il est NP 文 (7)では NP に限定詞がつかず, *c'est* NP 文 (8)では NP に限定詞がついている。(7)の *vétérinaire* は属性を表わし, 指示対象をもたない。一方, (8)の *un vétérinaire* はあるカテゴリーに属す成員を表わし, 指示対象をもつ。

NP が定名詞句の場合でも 一般に *il est* NP 文の NP は属性を表わし, 指示対象をもたない。*c'est* NP 文の NP はカテゴリーに属す成員を指す。

(9) *il est l'artisan de sa fortune. (DUF, p.85)*

(10) *il est le premier de sa classe. (DUF, p.1018)*

(11) *il est mon meilleur ami.*

(12) *C'est mon père.*

(13) *C'est la boîte à musique que tu as trouvée aux puces?*

(14) *C'est le dernier modèle de caméscope Sharp.*

2.2 *il est* 定名詞句文の限度

il est 定名詞句文については *Grammaire de la Phrase Française* が使用に制

約があることを指摘している。Il est le meilleur は性質付与を, C'est le meilleur は同定を表わし, Paul, il est mon meilleur ami は性質付与を, Paul, c'est mon meilleur ami は同定を表わすが, このうち Paul, il est mon meilleur ami は容認しないフランス語話者もあるという (p.210)。

C'est le meilleur が同定を表わすということは le meilleur が指示対象をもつということである。Il est le meilleur は le meilleur が形容詞の最上級なので属性だと解釈される。一方, il est mon meilleur ami が容認されにくいのは, 属詞が定名詞句であり指示対象を表わすことができるので, 属性を表わすと解釈することに抵抗を感じる話者がいるためであろう。次の発話のように定名詞句が指示対象をもつと解釈されるときは容認されない。

(15) *Ce monsieur, il est *le peintre que j'ai rencontré à Cannes*.

これらのことから il est 定名詞句文に「限度がある」というのは, 定名詞句が指示対象をもつという解釈の方が優勢になると容認されにくくなるということだとと言える。

3. il の指示対象

3 節では il について考察する。2 節で見たように, il est NP 文の NP は属性を表わし, 指示対象をもつことはなかったが, 反対に il は属性を表わすことはなく, 必ず指示対象をもつ。このような意味構造をもつのはなぜか。

3.1 値と変項

(16) Ma nièce, *elle* est étudiante.

(17) Si tu te maries, ton futur mari, *il* sera ton meilleur ami.

(18) Ce concours quadriennal est l'un des plus prestigieux du monde. La gagnante, *elle* est donc la meilleure chanteuse du monde.

これらの発話に見られるように, il の指示対象は意味特性が異なる。(16)では

特定の個体値である。(17), (18)では値が定まっていない変項である。このように il の指示対象の意味特性は均一ではないが、これらに共通する統一的な機能は何か？

il が用いられるのは、il の指示対象の意味特性にかかわらず、その属性を述べる場合である。属性を述べるには何についてか（属性を付与しようとしているものが何か）が明確にされていなければならない。すなわち、指示対象がそれ以外のものと識別されていなければならない。このことから、il は指示対象が他者から識別されているものを指すということができる。

3.2 集合

では、他者からの識別とは何か。先に見たように il の指示対象は個体値である場合も変項である場合もあるが、これらはいずれも集合の要素だと考えることができる。たとえば(16)では「私の姪」という一個の個体値によって構成される集合、(17)では「あなたの未来の夫」という一個の値を取りえる変項によって構成される集合であり、集合の要素の範囲は明確である。(18)ではコンクールのたびに異なる値を取る変項によって構成される集合であり、その意味では取りえる値の個数は限定されないが、elle が指すのは毎回のコンクールの勝者であり、取る値は一個である。集合の要素の範囲はやはり明確である。このように考えると、他者からの識別とは集合外の要素からの識別であり、il は集合外の要素との識別が完了しているとき、すなわち範囲が明確に規定されている集合に対して用いられると言うことができる。識別が完了し、要素の範囲が明確になっているため、集合外の要素は視野になく、集合内の要素に視野が絞られている。その結果、NP₂で属性のみを記述することができるのである。

4. c'est NP 文

2節, 3節より, il est NP 文は il が値または変項を指し, NP が属性を表わ

し指示対象がないという構造をもつことがわかった。では *c'est* NP 文はどのような構造をもつ文か。4 節ではまず、*ce* が指す対象の意味特性をみる。次に *c'est* NP 文の構造の代表的なタイプを取り上げる。

4.1 *ce* の指す対象

- (19) *Ce que je pense de lui? C'est un salaud.*
- (20) *La fille qui regarde le tableau de Vermeer, c'est Eliane.*
- (21) *Qui a oublié son parapluie? - C'est ma sœur.*
- (22) *Un cœur d'loyau, c'est quoi ça? - C'est une pièce de bœuf servie comme un faux-filet à l'os... grillée.*

(19)では *ce* は先行文脈の NP_1 の指示対象である値を指す。(20)でも発話場面にその人物が見えているような状況ならば先行文脈の NP_1 の指示対象である値を指す。(21)では取りえる値がひとつしかない変項を指す。(22)ではさまざまな値を取りえる変項を指す。このように、*ce* は、値も変項も指すことができる。

4.2 同定文 1 : 値付与型 (NP_1 =変項)

では、NP が指示対象をもつ *c'est* NP 文はどのような構造をもつかを見よう。

- (23) *Les fleurs qu'elle a achetées, ce sont les camélias dans le vase.*
- (24) *J'ai rencontré un peintre à Cannes. C'est ce monsieur qui porte des lunettes.*

(23), (24)では NP_1 も NP_2 も指示対象をもつ。 NP_1 の指示対象は聞き手にとって特定できない値（どれかはわからないが一個の値を取りえるような変項）であり、聞き手は集合内の要素として集合外の要素から役割レベルで識別することはできても、値レベルで他の要素と識別することはできない。一方 NP_2 は聞き手の目の前にある値、値レベルで識別可能な要素を指す。すなわち、このような文は聞き手が値レベルで他の要素と識別できない要素を識別できる要素に対応させる値付与型の同定文であると言うことができる。

4.3 同定文2：役割付与型 (NP_1 =値)

しかし、c'est NP 文はいつも役割解釈される指示対象に値を対応させるわけではない。

(25) Cet homme, c'est un ami de Pierre. (*français au présent*, p.91)

(26) Ce film, c'est une réussite. (*Ibid.*, p.91)

(27) (Lui,) c'est le roi des imbéciles.

これらの発話では ce が指す対象は他の個体からすでに識別された個体 (値) である。このような発話では NP_2 は値を明らかにするのが目的ではない。対象に新たに別の役割を付与するのが目的である。

このことは否定のスコープをみるとよくわかる。

(28) Ces fleurs, ce ne sont pas des pavots. Ce sont des pivoines.

(29) Qui est cet homme? C'est un phonologue? — Non, c'est un méticien.

値は NP_1 (ces fleurs, ce homme) で付与される。 NP_2 ではその値に付与される役割 (pavots と pivoines, phonologue と méticien) が改めて問題になっている。否定は値ではなく、 NP_2 の役割にかかっている。

このような発話では NP_1 の指す値に NP_2 の役割を付与することで、(潜在的に) 他の役割との間に対立が生じ、他の役割が排除される。すでに値レベルで識別された要素を役割レベルで識別しなおしているのである。

4.4 同定文3：役割付与型 (NP_1 =変項)

さらに、(30), (31) (32)のように NP_1 が変項であるときも、 NP_2 は変項や値といった要素ではなく、役割を付与するために用いられることがある。

(30) Qui sera la gagnante cette année? Ce sera une Anglaise, car le concours est réservé aux Anglaises.

優勝者が誰であるか決定されておらず、 NP_1 も NP_2 もどの値を取るかが決まっていない変項である。これら二つの変項は同じ値を取るはずであるが、異なる役割を付与されている。(30) はしたがって、同じ変項に異なる役割を付与する

役割付与の文であると言えよう。変項が役割レベルで識別しなおされているのである。

- (31) **Les fleurs que tu veux planter, ce sont des jonquilles ou des narcisses?**

NP₁ が変項を表わす場合の解釈について考えよう。話者が黄水仙か水仙のどちらか一方が植えられると思っているとき、**des jonquilles** と **des narcisses** で想定している値（変項）は NP₁ で想定している値（変項）と同じである。その同じ変項にどちらの役割が付与されるかをたずねている。NP₁ が表わす変項に値を付与しているのではない。役割レベルでの識別が行われているのである。

- (32) では NP₁ はさまざまな値を取りえる変項である。

- (32) **Une baleine, c'est un mammifère. Il remonte à la surface de l'eau toutes les cinquante minutes.**

NP₁ も NP₂ も変項を表わす。**baleine** に属す変項が別の視点から捉えると **mammifère** という役割を付与されることを述べた役割付与型の同定文である。

4.5 スペース間同定文：値付与型

発話の中には NP₁ と NP₂ がそれぞれ異なるスペースに置かれ、別々の値として認識されていたものが、実は同じ個体であることを述べるタイプのものがある。

- (33) **Ta dentiste, tu sais, en fait c'est ton amie d'enfance Katia.**

- (34) **La comtesse a une voix aérienne. Ce n'est pas Natalie Dessay, mais Patricia Petibon.**

(33) は掛りつけの歯医者（値）を幼なじみ（値）に対応させている。(34) では、舞台上伯爵夫人を演じる人物（値）を既知の歌手（値）に対応させている。このような同定文は異なるスペース間で値に値を対応させるスペース間同定文と呼べる。

4.6 総称文

総称文の中には *il est* NP 文ではなく *c'est* NP 文が用いられるものがある。 NP_1 がさまざまな値を取りえる変項タイプの総称文の場合、*il* が総称名詞句を受けるのは、取りえる値のひとつひとつについて記述する場合に限られる（3節）。たとえば、*Le président, il doit être élu conformément aux règles imposées.* では *le président* がさまざまな値を取りえるとはいえ、*le président* を選出するという行為はひとりひとりの *le président* について行われるので、集合は一度にひとつの要素から構成される閉集合であり、その範囲は明確である。このため *il* を用いることができる。*La gagnante, elle est donc la meilleure chanteuse du monde.* の *gagnante* のような名詞句の指す要素もコンクールにつき一個体なので、*il* が用いられると考えられる。一方、*Un homme, c'est fragile.* のような発話では、取りえる値のひとつひとつについて属性を述べているのではない。集合は取りえる値が無限個ある開集合である。この場合には集合の内と外を隔てる境界が明確ではないため、*ce* が用いられる。

5. 仮説

il と *ce* の競合の問題について主に *il est* NP 文と *c'est* NP 文がどのような意味構造をもつかという観点から考察を行った。以上の考察から次の仮説を立てることができる。

- ・ *il est* NP 文は範囲が明確である閉集合について要素（変項または値）の属性を述べる文である。
- ・ *c'est* NP 文は値あるいは役割レベルで要素を識別する同定文である。

il は変項であれ、値であれ、集合の要素の範囲が明確であるときに用いられる。*il est* NP 文はこのような範囲の安定した要素について属性を述べる文であり、NP は属性を表わし、指示対象をもたない。したがって、集合が開集合で、変項が取り得る値が無限にあるタイプの総称文では *il* を用いることができず、

対象を直示的に指すことのできる ce が用いられる。

一方, c'est NP 文については, 1) 値が不明である変項に値を付与する, 2) 値に異なる役割を付与する, 3) 値は不明のまま変項に異なる役割を付与する, 4) すでに値として認識されている要素に異なるスペースで値として認識されている要素を対応させる, という操作が行われていることを観察した。1) と 4) では値を付与することで他の値からの識別が行われる値レベルでの同定, 2) と 3) ではある役割を付与することで潜在的に他の役割を排除する役割レベルでの同定が認められた。

注

- (1) (4)は同一人物が7年ごとに変わるという解釈も可能であるが, ここでは7年ごとに別の人物に変わるという解釈を取り上げる。
- (2) 東郷は後者について「役割と値を兼ね備えた名詞句」が「新たな値を付与する同定文の主語」になっていると述べている。

引用文献

DUF (*Dictionnaire Universel Francophone*) (1997), Hachette.

Fauconnier, G. (1984): *Espaces Mentaux*, Minuit.

Le Goffic, P. (1993): *Grammaire de la Phrase Française*, Hachette.

Monnerie, A. (1987): *Le français au présent*, Didier.

井元 秀剛 (1991): 「人称代名詞 IL の指示対象—主に CE との対比において—」, 『仏語仏文学研究』7号, 東京大学仏語仏文学研究会, pp.117-141.

東郷雄二 (1988): 「Mon frère, il est linguiste et le coupable, c'est lui.—代名詞 IL と CE の用法について」, 『フランス語フランス文学研究』53号, pp.102-111.

—— (1993): 「指示と照応—照応的代名詞 IL と CE の用法を中心に」, 『フランス語とはどういう言語か』, pp. 75-94.

(文学部非常勤講師)